

大学院進学を希望するのはどのような生徒か？

— 私立大学附属・系属校の高校生を対象とした分析 —

武藤 浩子

キーワード：大学院、学習時間、学習意欲、課外活動、探求学習、附属・系属高校

【要 旨】 本稿は、これまでの高等教育研究、また大学院研究において、ほとんど顧みてこられなかった高校生の大学や大学院への進学意識に着目し、高校時代から大学院進学を視野に入れている生徒はどのような生徒なのか、その学習行動や学習に関わる意欲・態度について検討するものである。また、これにより、大学院研究において、高校生の大学院への進学意識に着目することの意義を問うものである。

生徒のほとんどが大学に進学する選抜性の高い私立大学附属・系属高校の生徒を対象として、生徒が希望する大学の教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）別に分析したところ、次のことが明らかになった。

(1) 大学院への進学を希望する生徒は、大学学部までの進学を希望する生徒より、授業外の学習時間が長い。特に博士課程への進学を希望する生徒は、高校1年から3年のどの学年においても、大学学部までを希望する生徒よりも、有意に長い時間学習をしていた。(2) 大学院への進学を希望する生徒は、「教科内容は面白い」と考え、「興味があることに意欲的」な傾向がある一方、「学校行事」への参加については消極的な傾向があった。また、「探求学習への意欲」について、探求的な学習に関する発表会を経験した生徒群においては、大学学部までを希望する生徒よりも、大学院、特に博士課程への進学を希望する生徒のほうが、「探求学習への意欲」が下がる可能性が示唆された。(3) 大学院への進学を希望する生徒は、図書館利用、学外ボランティア、ミュージアム訪問などの学校外の活動にも積極的であることが示された。

本研究によって、大学、また大学院への進学希望という将来展望の違いによって、生徒の学習行動や学習に関する意欲・態度が異なることが示唆された。最後に、大学院研究において、大学院生や大学院修了者を対象とするだけでなく、大学入学前の高校生の進学意識に着目することの意義について述べた。

1. 問題の設定

本稿の目的は、高校生の大学や大学院への進学意識に着目し、高校時代から大学院進学を視野に入れている生徒はどのような生徒なのか、その学習行動や学習に関わる意欲・態度について検討することである。

近年、大学進学率は伸長しており、2021年度の大学進学率は58.9%で過去最高となっている（文部科学省 2021）。このように6割近くの高校生が大学に進学する中、大学院への進学者も増加しているのだろうか。大学院在籍者数の推移をみると、1991年の98,650人から2018年には254,037人と、約2.6倍に増えており、2006年頃以降は多少の増減がありながらも横ばい状態が続いている（中央教育審議会大学分科会 2018）。また、大学（学部）から大学院等への進学率は、2017年以降、2021年まで、11%台が続いており、大学院進学は、ここ数年ある程度安定的な状態に留まっている（文部科学省 2021）。2021年の大学院修士課程、博士課程への進学状況をみ

ると、学部生のうち11.8%が修士課程等に進学をしており、修士課程から博士課程への進学率は10.1%である。大学生の約1割が修士課程に進学し、うち約1割が博士課程に進学していることから、大学院への進学者はそれほど少数派ではないといえよう。一方、諸外国と比較すると、日本の大学院進学率は低く、いかに優秀な学生を大学院に引き付けるかが課題になって久しい（中央教育審議会大学分科会 2019）。しかしながら、そもそも現状において、どのような特性を持つ者が大学院へ進学しようとしているのだろうか。本稿は、大学や大学院進学を希望する高校生を対象として、それを検討することを試みる。

次項では、高校生の大学や大学院への進学希望に関する調査を確認するとともに、高校生の進学希望や学習行動などに関わる先行研究について検討する。

2. 先行研究と分析の枠組み

まず、高校生を対象として、大学や大学院への進学希望を問うた調査をみてみよう¹。高校生を対象とした学習に関する調査（学研教育総合研究所 2018²）では、四年制大学以上の進学を希望する高校生は59.8%、うち大学院を希望する生徒は9.5%（修士課程まで6.5%、博士課程まで3.0%）であった。また高校生を対象とした他の調査（ベネッセ 2015³）でも、高校生の大学学部、また大学院進学までの希望が問われており、高校生は、高校在学中から、大学学部までの進学を希望するのか、大学院進学までを希望するのか、ある程度意識的であることがみてとれる。しかし、このような大学院への進学希望は、高校生の曖昧な夢の一つであるのか、当該生徒の学習行動とも関連するものであるのかは不明である。

高校生の進学と学習に関わる先行研究をみると、溝上（2018）は、高校時の資質や能力が、大学での資質や能力に影響を与えていることを明らかにした⁴。また、山村（2019）は、進路について具体的イメージを持っているほど、つまり高校時に進学したい分野や大学が明確になっているほど、学習時間が増えることを示した。これらの先行研究から、高校時の資質・能力は、大学での資質・能力に影響を与えるとともに、高校時代に将来ビジョンを持つことは、高校時代の学習行動にも影響を与えられらる。

次に大学院進学に関する研究をみると、濱中（2016）は、私立進学校の卒業生を対象とした調査から、高校での成績優秀層が大学院に進学する傾向が強いことを示した⁵。この研究は、高校時の学力が大学院進学と関連することを示したものであり、溝上（2018）を参照すると、高校時の成績の良さが、大学での成績の良さにつながり、それが大学院への進学を推進するものとみることができる。

前述したように、高校生は、高校在学中から、大学学部までの進学を希望するのか、大学院進学までを希望するのか、意識的だと思われるが、大学学部までを希望する生徒と、大学院への進学を希望する生徒では、高校での学習行動や学習に関わる態度が異なるのかまでは明らかにされていない。

また濱中は、大学院生の学習に関わる態度について、若い世代の修士課程修了者の「課題達成力」や「素直さ」が有意に低くなってきていることを示した（濱中 2016）。濱中は、この結果から、修士課程に進んだ者は「出された指示を素直に受け止めない」傾向があるとし、このよう

な状況が、「優秀な学生が大学院に進学してこない」という大学教員の声、つまり大学院生の資質への疑義に繋がっているのではないかと考察している。ここで指摘されている「出された指示を素直に受け止めない」という修士課程修了者の態度は、大学以降に培われたものなのか、それとも高校時代に大学院進学を希望する生徒においてもみられる傾向であるかは不明なままである。

そこで本稿では、高校生が希望する大学の教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）に着目し、大学や大学院への進学希望と、高校での学習行動、学習に関わる意欲・態度との関連について検討を行う。具体的には、高校生が希望する大学の教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）によって、高校生を3つのグループに分け、それぞれの学習時間、教科学習や探求学習等への意欲などについて差異がみられるのか比較分析を行う。

分析にあたって、次の3つの課題を設定する。

- (1) 大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学習時間に差異があるのか。
- (2) 大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学校での教科学習や探求学習などの意欲に差異があるのか。
- (3) 大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学校外での活動への意欲に差異があるのか。

3. 調査とデータ概要

3.1. 調査概要

本研究では、私立X大学附属・系属高校6校の高校生を対象としたアンケート調査結果を分析対象とする。その理由として、これらの高校では系列大学への推薦入学者が少ないという特色があるものの、選抜性の高い高校であり、ほぼ全員が大学進学を予定していることがある。このように大学進学を自明視している高校生にとっては、大学卒業後の大学院への進学についても、選択肢のひとつとなるものと思われる。また、本研究は、修士課程だけでなく、博士課程への進学を希望する生徒を対象として分析するため、博士課程への進学希望者が少なくないであろう選抜性の高い高校であることが望ましいと考えた⁶。

調査にあたっては、筆者らが私立X大学附属・系属高校の教職員等に調査への協力を依頼し、そのうち協力が得られた6校を対象として、2019年9月、10月に質問紙調査を実施した。質問内容は、授業以外の学習時間数、教科学習や探求学習などへの意欲、学校外での学習活動、大学や大学院への進学希望（大学学部、修士課程、博士課程）などである。質問調査票の回収件数は4,081件であった。本研究では、高校生の大学や大学院への進学希望に着目するため、希望する教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）に回答した生徒を対象として主な分析を行うこととなる。

3.2. データの概要

生徒が希望する大学の教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）に着目した基礎分析の結果を示す（表1）。大学院への進学率は文系、理系によって異なることが広く知られているが、本

データでも高校生が希望する教育段階と、大学の希望学部との関係について確認しておく。生徒が希望する教育段階について全体の傾向をみると、大学学部までを希望する者は66.3%、修士課程までの希望者は10.2%、博士課程の希望者は3.1%であった。また、希望する専攻別にみると、理系学部への進学を予定している者に大学院への進学希望者が多く、修士課程28.7%、博士課程8.0%であった。他方、文系では、修士課程3.6%、博士課程1.5%となっており、修士課程への進学希望者の割合をみると、理系は文系の約8倍である。本稿では、理系・文系別での分析は行わないが、理系学部への進学を予定する生徒に、修士課程や博士課程への進学希望者が多いことは、実際の大学院進学状況を反映しているものと考えられる。

また、前出の高校生を対象とした調査（ベネッセ 2015）では、「無回答・不明」が1.9%であったが、本調査では、希望する教育段階が未定の者は、20%と多い傾向がみられる。それぞれの調査で選択肢が異なるため一概に比較することはできないが、本調査はほぼ全員が大学進学を希望する高校を対象としていることから、高校卒業後に、大学学部まで進学するのか、大学院まで進学するのかを決めかねている生徒が多いことを意味していると考えられる。当該高校の生徒にとって、大学院への進学も選択肢のひとつとなっているものの、何らかの理由で決めかねている者が多いことを示唆するものだろう。また、希望学部が未定の生徒は、大学の教育段階の希望についても未定である割合が高い（48.2%）。

表1 希望する大学の教育段階（文系・理系別）

	大学学部	修士課程	博士課程	その他	未定	合計 (n)
文系（文学、語学、法学、経済・経営・商学、社会学、国際関係学）	80.9	3.6	1.5	0.3	13.8	100.0 (2,358)
理系（理学、工学、農・水産学、医・歯・獣医学、薬学、看護学、保健学）	36.9	28.7	8.0	0.9	25.6	100.0 (1,041)
文理系（教員養成、教育学、生活科学、芸術学、音楽、総合科学）	76.4	7.0	2.3	0.4	14.0	100.0 (258)
未定	48.5	2.8	0.6	0.0	48.2	100.0 (363)
合計	66.3	10.2	3.1	0.4	20.0	100.0 (4,020)

次に、同じデータを用いて、学年別に、希望する教育段階を示したのが表2である。未定の生徒、つまり大学学部までの進学を希望するのか、大学院まで進学するのかを決めきれていない生徒の割合をみると、高校1年生では26.5%と4分の1以上であったが、2年生は16.6%、3年生は15.8%と未定の生徒の比率が下がっている。学年が上がるに従って、大学学部までとするのか、大学院までの進学を希望するのかが決まっていく様子が伺われる。

表2 希望する大学の教育段階（学年別）

	大学学部	修士課程	博士課程	その他	未定	合計 (n)
1年生	61.5	8.3	3.2	0.6	26.5	100.0 (1,439)
2年生	70.6	9.6	2.9	0.2	16.6	100.0 (1,310)
3年生	66.6	13.3	3.6	0.8	15.8	100.0 (1,244)
合計	66.1	10.3	3.2	0.5	19.9	100.0 (3,993)

4. 分析結果

本分析では、生徒が希望する教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）によって、3グループに分け、グループ間の学習行動や学習に関わる意欲・態度などについて比較を行う。そのため希望する教育段階が未定のもの分析対象外となる。また、分析に用いるのは、授業以外の学習時間数、教科学習や探求学習などへの意欲、学校外での学習活動（スポーツクラブ、図書館利用等）への参加や利用などである⁷。高校生の大学学部、修士課程、博士課程への進学希望と、当該生徒の学習行動について、まず学習時間に着目して分析を行う。

4.1. 大学・大学院への進学希望と学習時間

「大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学習時間に差異があるのか」

(1) 学習時間

3グループそれぞれの学習時間（平日、週末）の平均値をグラフで示したのが、図1である。平日では、博士課程希望者と他2グループ間で有意差があり ($p < .001$)、週末については、3

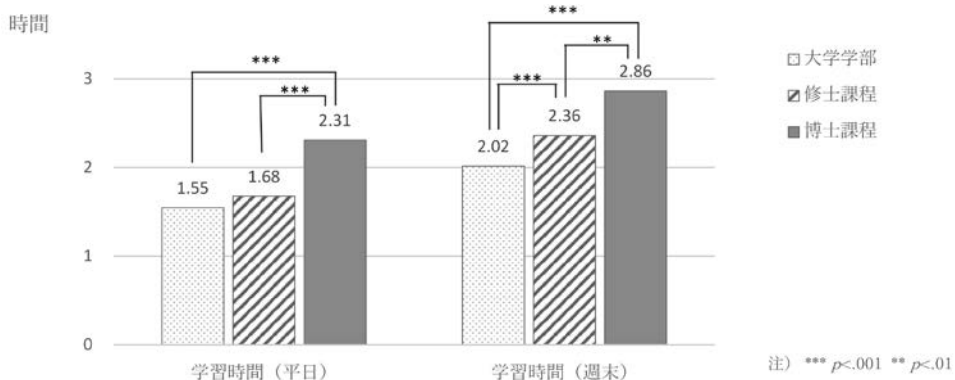


図1 学習時間

グループ間で有意差があった（修士課程と博士課程間は $p < .01$ 、他は $p < .001$ ）。この結果から、大学院への進学を希望する生徒、特に博士課程への進学を希望している生徒は、高校時代から学習時間が長いといえる。

学習時間数を比較すると、博士課程希望者は、大学学部までの進学希望者に比べて、平日で平均約45分、休日では約50分長く学習をしている。これを1週間の学習時間に換算すると、博士課程への進学を希望している生徒は、大学学部までの進学を希望する生徒より、1週間で約5.5時間長く、学習をしていることになる。

では、大学院への進学を希望する生徒は、高校1年生のときから長い時間、学習をしているのだろうか。次に学習時間を学年別にみてみよう。

(2) 学習時間（学年別）

大学院進学を希望する生徒は、高校1年次から学習時間が長いのだろうか。大学学部、修士課程、博士課程への進学希望者それぞれの週末の学習時間を、学年別に示したのが図2である。この図からは、どの学年においても、大学学部までの進学を希望する生徒より、修士課程への進学を希望する生徒のほうが学習時間は長く、それよりも博士課程への進学希望者の学習時間が長い傾向があることがわかる。有意差をみると、1年生で、大学学部と博士課程間で有意差があり（ $p < .01$ ）、2年生では、大学学部と修士課程（ $p < .05$ ）、大学学部と博士課程（ $p < .001$ ）で、また3年生では大学学部と博士課程（ $p < .05$ ）で有意差があった⁸。博士課程への進学を希望する生徒は、高校1年から3年まで、継続して長い時間学習をしているといえよう。

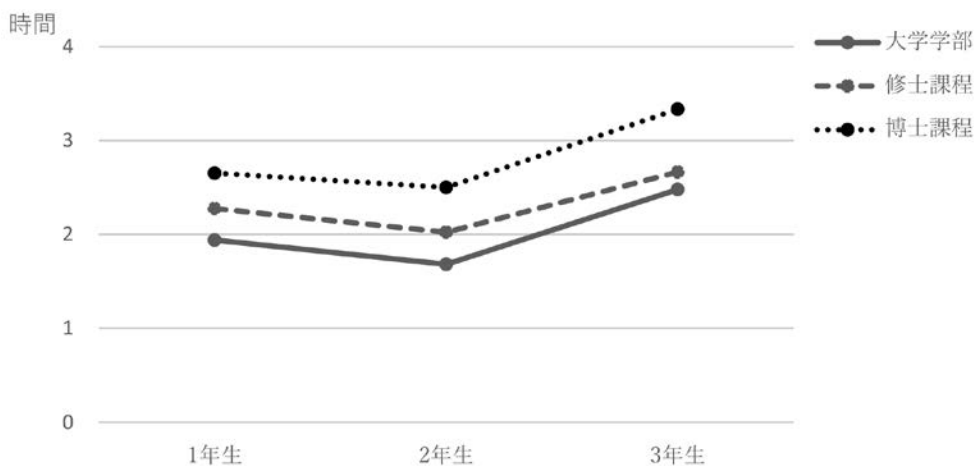


図2 学習時間（学年別）

大学進学を自明視している高校生には、大学進学だけでなく、希望する学部への進学のために勉強をするという動機付けがあるものと考えられる。そこで、大学院進学を考えている生徒は、大学の希望学部への進学のために頑張って長時間勉強をしなければいけないと考えているのか、次項で確認しておこう。

(3) 希望学部への進学のための頑張りと学習時間

修士課程や博士課程への進学希望者は、希望学部に進学するために、頑張って勉強しなければならないと思っており、その思いが学習時間を増加させているのだろうか。それとも希望学部への進学については余裕を持っているのだろうか。「第一希望の学部へ進学するためには、勉強などをもっと頑張らなければいけないと思いますか」という質問に対して、「そう思う」、「とてもそう思う」と回答した生徒の割合を示したのが表3である。これをみると、博士課程への進学希望者では、希望学部に進学するために、もっと頑張らなければいけないと考えている生徒の割合は低い。このことから、大学院、特に博士課程への進学希望者の学習時間の長さは、大学の希望学部への進学を目的としたものではないと考えられる。大学院進学希望者の学習時間の長さは、大学への進学を目的としたものではなく、彼ら／彼女らの学習への意欲が、学習時間を増やしているものとも考えられる。

表3 希望学部進学のための頑張り

	%		
	大学学部	修士課程	博士課程
希望学部進学のために頑張らなくては いけない	89.4	86.7	76.2

$\chi^2(2) = 14.387 \quad p < .001$

では次に、大学や大学院への進学希望と、教科学習や探求学習などへの意欲との関連について確認していこう。

4.2. 大学・大学院進学希望と教科学習・探求学習への意欲

「大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学校での教科学習や探求学習などの意欲に差異があるのか」

(1) 教科学習、探求学習などへの意欲

大学院への進学を希望する生徒は、教科学習や探求学習に意欲的に取り組んでいるのだろうか。大学学部、修士課程、博士課程それぞれへの進学を希望する生徒の、教科学習、探求学習への意欲、学校行事への積極性などについて示したのが図3である。ここでは各項目について、「ややあてはまる」「よくあてはまる」と回答した生徒の割合を棒グラフで示している。項目ごとに χ^2 検定を行ったところ、有意差があったのは、「教科内容は面白い」、「学校行事に積極的」 「キャリア関係に意欲的⁹⁾」、「興味があることに意欲的」であった(すべて $p < .001$)。特に、博士課程希望者は、「キャリア関係に意欲的」であり、「興味があることに意欲的」な傾向があることがわかる。大学院への進学を希望する生徒は、高校生のときから、教科内容が面白いと思っており、将来のキャリアに関することにも積極的で、自分の興味があることには意欲的に取り組んでいることが示された。このことから、前項で検討した大学院への進学希望者の学習時間の長さ

は、教科内容を面白いと思ひ、興味があることに意欲的であるためとも考えられ、修士課程までを希望する生徒よりも、博士課程を希望する生徒の方がその傾向が強く示されている。

しかし、「学校行事に積極的」については、大学学部までの進学を希望する生徒のほうが高い値となっており、修士課程、博士課程を希望する生徒は、それに比べると「学校行事に積極的」ではない傾向がみられる。

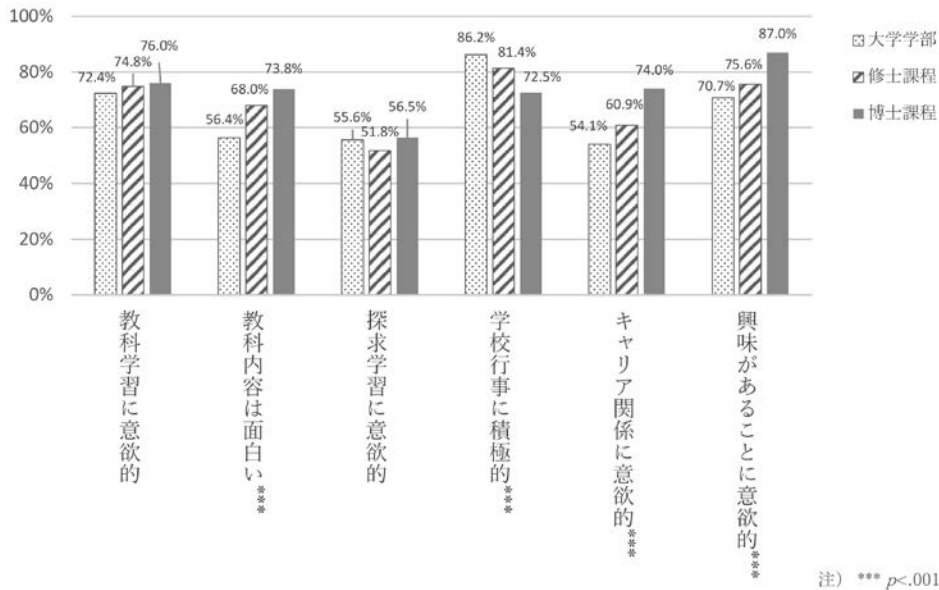


図3 教科学習、探求学習等への意欲・態度

また、「探求学習に意欲的」については差異がみられず、大学院への進学希望者が、探求的な学習に意欲的に取り組んでいるとは言えないことが示された。大学院進学希望者は、教科学習が面白いと思っており、興味があることにも意欲的である一方、なぜ、探求学習にはそれほど意欲的に取り組んでいないのだろうか。その理由として、学校で探求学習を行ったとしても、その探求学習の成果を発表するような場がないのであれば、探求学習に意欲的に取り組むことにつながらないということも考えられよう。そこで次項において、探求学習への意欲と、「探究的な学習に関する学校外での発表会やコンテスト」への参加経験との関連に着目し、探求学習への意欲について追加分析を行う。

(2) 探求的な学習に関する発表会参加と探求学習への意欲

本項では、「探究的な学習に関する学校外での発表会やコンテスト」への参加経験に着目し、探求的な学習に関する発表会への参加がほとんどないと答えた生徒(2,878名)と、年に1回以上あると答えた生徒(249名)に分け、探求学習への意欲について、大学学部、修士課程、博士課程の3グループで比較した(図4)。その結果、探求的な学習に関する発表会に参加しなかった生徒では、探求学習への意欲についてグループ間の差異はほとんどないものの、発表会を経験

した生徒においては、大学学部までの進学を希望する生徒よりも、大学院への進学希望者のほうが、探求学習への意欲が下がる傾向がみられた ($p < .05$)¹⁰。また、図4の「探求学習の発表会 なかった」と「探求学習の発表会 あった」のグラフを見比べると、探求的な学習に関する発表会に参加することは、大学学部、また修士課程への進学を希望する生徒にとっては、探求学習への意欲を上げるものの、博士課程への進学希望者にとっては逆に探求学習への意欲を逆に下げってしまう可能性があるともみることができる。

前項で、博士課程への進学を希望する生徒は、学校行事には積極的ではない傾向があることを示したが、探求的な学習に関する発表会を、「探求学習に関連して集団で行う学校行事」として捉えれば、自分の興味があることには意欲的な博士課程への進学希望者は、グループで行われることも多いであろう探求的な学習に関わる発表会を経験することで、本来、自分の興味関心に基づいて行われる探求学習において、自分自身の興味を優先しづらくなり、探求学習に意欲的に取り組まないという傾向をみせるのではないかと考えられる。

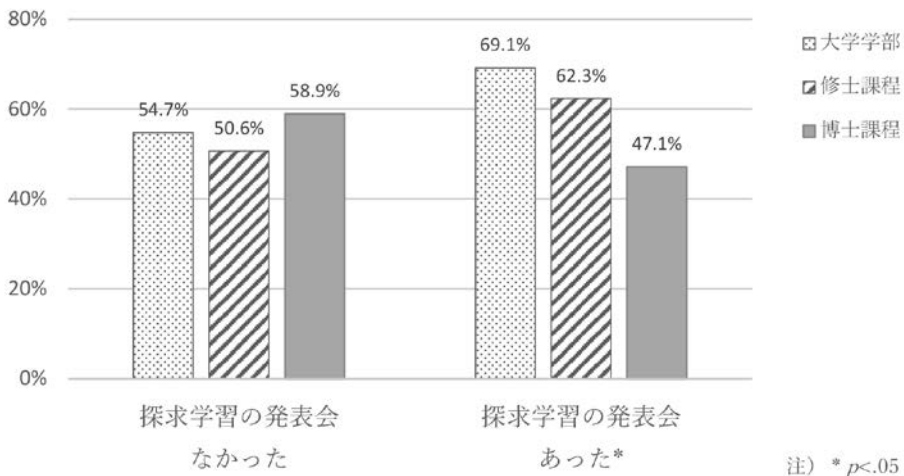


図4 探求学習への意欲（発表会の経験別）

4.3. 学校外での活動への意欲

「大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学校外での活動への意欲に差異があるのか」

では、大学院への進学を希望する生徒は、学校外での活動に意欲的に取り組んでいるのだろうか。ここでは、図書館（学校図書館）利用も含め、スポーツクラブ、学外ボランティアや、ミュージアム訪問などについて確認する（図5）。図書館については、1週間に1回以上利用すると回答した生徒の割合を、また他の項目については、半年に1回以上参加すると回答した生徒の割合を示している。各項目において χ^2 検定を行ったところ、スポーツクラブ以外の項目で有意な差がみられた（すべて $p < .001$ ）。

それぞれの項目について確認していこう。大学院への進学を希望する生徒は、図書館を良く利用しており、大学学部までを希望する生徒の図書館利用が約20%に留まるのに比べ、博士課程への進学希望者では、40%以上と高くなっている。ボランティアについては、音楽教室（楽器・合唱団）、ミュージアム（博物館・美術館）訪問、表現活動（美術製作・ダンスなど）についても、大学学部までの希望者より、大学院への進学希望者のほうが多く参加している。特に、ミュージアム訪問については、大学学部までを希望する生徒では約10%に留まるが、博士課程への進学を希望する生徒においては約34%と高い割合となっている。

これらの分析からは、大学院への進学希望者、特に博士課程への進学を希望する生徒は、学校外での学習活動にも積極的に参加する傾向があることが確認された。博士課程への進学を希望する生徒は、図3で示したように学校行事には積極的ではない傾向を示したものの、学校外の活動においては（集団で行われることも多いと思われるボランティア活動も含め）積極的に参加している。これについて、大学院、特に博士課程への進学を希望する生徒の「興味があることに意欲的」な特徴から考えると、学校外で参加する活動は、自分の興味のあることであり、その興味のあることであれば、集団での行動が含まれていても積極的に参加しているものとも考えられる。

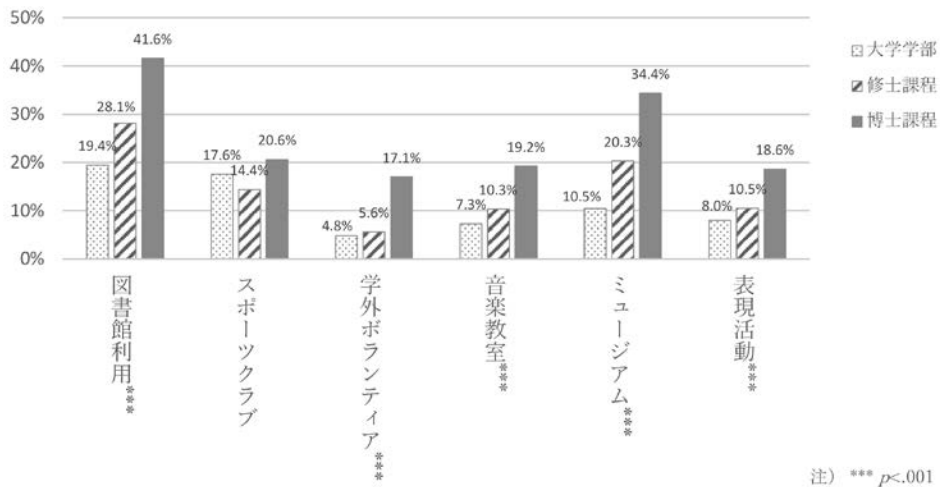


図5 学校外での活動

5. まとめと考察

本研究は、高校生の大学や大学院への進学意識に着目し、高校時代から大学院進学を視野に入れている生徒はどのような生徒なのか、その学習行動や学習に関わる意欲・態度について検討してきた。本稿で設定した3つの課題に従い結果をまとめる。

(1) 大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学習時間に差異があるのか。

平日と週末に分けて、学習時間について検討した結果、平日では、博士課程への進学希望者が

他2グループよりも長時間学習をしており、週末については、大学学部までの進学を希望する生徒より、修士課程への進学を希望する生徒が、また修士課程への進学を希望する生徒より、博士課程への進学を希望する生徒が長時間学習をしていることが明らかになった。

高校のときから、大学院進学を希望する生徒、特に博士課程への進学を希望している生徒は、大学学部までを希望する生徒より、長く学習をしている。

また、学習時間を学年別に確認したところ、高校1年から3年のどの学年においても、大学学部までを希望する生徒より、博士課程への進学を希望する生徒のほうが長時間学習をしていた。さらに、博士課程への進学希望者においては、大学の希望学部への進学のために勉強を頑張らなければいけないと考えている生徒の割合が低いことから、博士課程への進学希望者の学習時間の長さは、大学進学に関わるものではないことが示唆され、大学院への進学を希望する生徒の学習意欲が、学習時間を増やしているものとも考えられた。

(2) 大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学校での教科学習や探求学習などの意欲に差異があるのか。

大学院への進学を希望する生徒は、「教科内容は面白い」と思っており、「キャリア関係に意欲的」、「興味があることに意欲的」な傾向があった。他方、「学校行事」については、大学学部までを希望する生徒の方が、大学院への進学を希望する生徒よりも積極的な傾向があることが示された。

また、「探求学習への意欲」については、3グループ間で差異がみられなかった。そこで、探究的な学習に関する発表会への参加経験が、探求学習への参加意欲を向上させるのではないかと考え、探究的な学習に関する発表会への参加経験の有無と、「探求学習への意欲」について検討した。その結果、探究的な学習に関する発表会を経験した生徒群においては、大学学部までを希望する生徒よりも、大学院への進学を希望する生徒、特に博士課程への進学を希望する生徒のほうが、「探求学習への意欲」が下がることが示された。探究的な学習に関する発表会への参加は、博士課程への進学を希望する生徒の「探求学習への意欲」を上げるのではなく、逆に下げる可能性が示唆された。

この理由を考えるにあたって参考になるのは、大学院への進学希望者は、学校行事には積極的ではない傾向があることである(図3)。探究的な学習に関する発表会を、「探求学習に関連して集団で行う学校行事」として捉えれば、自分の興味があることには意欲的な大学院への進学希望者、特に博士課程への進学希望者は、グループで行われることも多いであろう探究的な学習に関する発表会に関わることで、探求学習に意欲的に取り組まなくなることが考えられた。また、学校で行われる探求学習のグループ活動では、自分自身の興味が優先しづらくなり、探求学習への参加意欲が減ってしまうということも考えられる。

(3) 大学院進学を希望する生徒と、大学学部までの進学を希望する生徒では、学校外での活動への意欲に差異があるのか。

大学院への進学を希望する生徒は、図書館を良く利用しており、また、学外ボランティア、音

楽教室（楽器・合唱団）、ミュージアム（博物館・美術館）訪問、表現活動（美術製作・ダンスなど）にも参加している者が多い。大学院への進学を希望する生徒は、学校において教科内容を面白いと思ひ、キャリア関係にも積極的であるだけでなく、このような学校外での活動についても積極的に参加していることが示された。

特に博士課程への進学を希望する生徒は、グループで行われることも少なくないであろうボランティア活動のような学校外での学習活動には積極的に参加していた。これを、博士課程への進学を希望する生徒の「興味があることに意欲的」な特徴から考えると、学校外の活動は自分の興味のあることであり、そのような興味を持ち続けられる活動であるならば、集団行動が含まれていたとしても積極的に参加しているものとも考えられる。

これらの分析によって本研究が示してきたのは、高校生が希望する大学の教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）によって、当該生徒の学習行動や学習に関わる意欲・態度が異なることである。

ではこれらの結果から、高校時代から大学院への進学を希望するのはどのような生徒だといえるのだろうか。大学院、特に博士課程への進学を希望する生徒は、大学の希望学部への入学を目的とせずとも、高校1年生のときから学習時間が長く、よく勉強している。また図書館利用も多く、本に親しみ、図書館でも学習をしているものと考えられる。さらに教科内容を面白いと思っており、将来の自分のキャリアや、興味のあることについても意欲的、積極的である。さらに学校外の社会的、文化的活動についても積極的であった。

学習時間と教科内容への面白さや興味とを結びつけて考えると、大学院への進学を希望する生徒は、教科内容を面白いと思っており、興味のあることには意欲的であることから、その学びへの意欲が、学習時間を増加させているものと考えられる。また、大学院進学を希望する生徒を、修士課程への進学希望者と博士課程への進学希望者とに分けて考えると、博士課程への進学を希望する生徒のほうが、上記のような傾向を強く示している。吉田（2020）は、文系（特に社会科学系）大学院への進学者や修了者を対象とした研究から、大学院進学者は、「個人の学習欲求という内なる動機付け」によって積極的に大学院で学習をしていると述べた。本稿が対象とした大学院への進学を希望する高校生においても、このような「個人の学習欲求という内なる動機付け」に基づいて、学校内外の学習や活動に取り組んでいるように思われる。

他方、大学院への進学を希望する生徒、特に博士課程までの進学を希望する生徒は、学校行事への参加については消極的な傾向がみられた。濱中（2016）は、修士課程修了者の「出された指示を素直に受け止めない」傾向について言及したが、大学院への進学を希望する高校生においても、学校行事のような集団行動や、その中で出される他者からの指示をそのまま受け止めることについて、すでに苦手意識のようなものを持っているものとも考えられるのではないだろうか。濱中（2016）が、修士課程修了者の傾向として示したものが、大学院への進学を希望する高校生にも見受けられるとすると、これまで修士課程修了者の問題として捉えられていたものは、大学や修士課程での教育の問題ではなく、大学院進学を目指す者が高校時代から持っている特性であることも十分考えられるだろう。

しかし、大学院への進学を希望する生徒は、グループでの活動を忌避しているだけではないことも示された。特に博士課程への進学を希望する生徒は、グループで行われることも多いと思われるボランティア活動に積極的に参加している様子が伺えた。大学院への進学希望者は、集団での行動を一様に避けているわけではなく、自ら選択することができる自分の興味の対象と重なる活動であれば、積極的に参加をするとも考えられる。大学院への進学を希望する生徒は、他者からの指示よりも、自分の「興味があることに意欲的」であり、それが学習行動や学習に関わる意欲・態度に影響を与えているとも考えられる。

本稿は、高校生の大学や大学院への進学希望に着目し、選抜性の高い私立大学附属・系属高校の生徒を対象とした調査データから、高校生が希望する大学の教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）によって、生徒の学習行動や学習に関する意欲・態度が異なることを示してきた。大学生が大学院に進学するか否かは、高校時代にすでにある程度決定されており、生徒の大学学部や大学院への進学希望は、彼ら／彼女らの学習行動や学習に関わる意欲・態度としても表出されている。

溝上（2018）は、大学での資質・能力は、高校時代の資質や能力に影響されることを示したが、本研究は、大学から大学院への進学希望は、高校時代にある程度決定されていて、それは高校生の曖昧な夢の一つではなく、彼ら／彼女らの学習行動や学習に関する意欲・態度とも結びついていることを明らかにした。大学院（修士課程、博士課程）への進学が、すでに高校時代からある程度決定されているのであれば、大学院研究において、大学院生や大学院修了者を対象とするだけでなく、大学入学前の高校生にも着目することで、大学院への進学に影響を与える要因について、検討できるものとする。このような大学院への進学に影響を与える多様な要因の検討は、本研究が残した課題の一つである。

また、本稿では、文系、理系を分けずに分析したが、さらに対象者を増やして、文系と理系の違いについても検討する必要があると考える。本研究では、選抜性の高い私立大学附属・系属高校の生徒を対象とした。選抜性の高い私立高校や、進学校といわれる高校の生徒においても同様に、生徒が希望する大学の教育段階（大学学部、修士課程、博士課程）によって、学習行動や学習に関わる意欲・態度に異なる傾向がみられるのか、さらなる調査・研究が必要だと考えている。これらを今後の研究の課題としたい。

付 記

本論文は、早稲田大学教育総合研究所研究部会「グローバル時代における高大接続に関する研究：大学附属校・系属校を対象として（代表：吉田文）」（2019年度：B-11、2020年度：B-3）の研究成果の一部である。

注

- 1 本稿では、高校生の大学や大学院への進学意識について検討したが、中学生を対象として、大学や大学院への進学意識に着目した調査・分析も行われている。例えば、舞田（2018）は、TIMSS（国際数学・理科教育動向調査）2015から、日本の中学2年生の大学院進学希望率が3%であること、

- また理科の高得点層に限ると7%となることを示している。どのような生徒を対象とするかによって、大学院進学希望率は変わってくるものと考えられるが、中学生よりも、大学進学がより現実味を持つ高校生のほうが、大学や大学院への進学希望が明確になるのではないかと考えられる。
- 2 この調査は、全国の高校生（1～3年）600名へのインターネット調査として実施されている。
 - 3 ベネッセ（2015）の調査では、公立高校普通科の高校2年生を対象としており、四年制大学までを希望する生徒は71.0%、大学院までを希望する生徒は12.3%であった。実際の大学進学率と比較すると、この調査では、ある程度学力の高い生徒が調査対象となっていると考えられる。
 - 4 高校時と大学での成績の関連については、中西（2017）でも明らかにされている。中西は、パネルデータの分析により、高校3年時の成績が、大学の成績に影響を与えることを示した。この分析では、高校3年生を対象に行われた第1回調査（2005年11月実施）と第5回調査（2009年12月実施）の2時点データを用いている。
 - 5 村澤（2020）は、SSM（社会階層と社会移動調査研究会）2015年および2005年のデータを用いて、大学院進学には、父親の学歴と中学3年生時点の成績が影響を与えることを示している。
 - 6 対象とした高校は私立高校であり、公立高校と比較すると授業料も高いことから、家庭の社会的背景（SES）はある程度高いものと考えられる。
 - 7 学習時間については、ふだん、学校での授業以外に1日に何時間くらい勉強しているか、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めて尋ねた。教科学習への意欲などについては、「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「よくあてはまる」の4件法で問うた。図書館（学校図書館）利用については、「ほぼ利用しない」「1学期に1～2回」「1か月に1～2回」「1週間に1～2回」「1週間に3回以上」で問い、それ以外の学校外での活動については、「全くしない」「年に1回程度」「半年に1回～月に1回程度」「2週に1回以上」の4件法で問うた。
 - 8 平日の学習時間については、全学年で大学学部と博士課程間で有意差がみられ（1年 $p < .05$ 、2年 $p < .001$ 、3年 $p < .001$ ）、また、修士課程と博士課程では2年（ $p < .05$ ）と、3年（ $p < .001$ ）で有意な差が示された。
 - 9 「キャリア関係に意欲的」の質問文は、「高校の授業とは関係ないが、将来のキャリアに役立つような事に意欲的に取り組んでいる」である。
 - 10 探求的な学習に関する発表会を経験した生徒249名のうち、大学学部までの進学希望者は162名、修士課程への進学希望者53名、博士課程への進学希望者34名であった。

参考文献

- 学研教育総合研究所, 2018, 「高校生白書Web版」<https://www.gakken.co.jp/kyouikusuouken/whitepaper/h201809/index.html>.
- 中央教育審議会大学分科会, 2018, 「2040年を見据えた大学院教育の体質改善～社会や学修者の需要に応える大学院教育の実現～（審議まとめ（素案））関連データ」https://www.mext.go.jp/content/1423020_008.pdf.
- 中央教育審議会大学分科会, 2019, 「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～（審議まとめ）」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/02/18/1412981_001r.pdf.
- 中西啓喜, 2017, 「国立大学は推薦・AO入試によって「成績優秀な学生」を獲得できているのか? : エリートセクターにおけるマス選抜の導入」『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習』24, pp.63-74.
- 濱中淳子, 2016, 『「超進学校」開成・灘の卒業生—その教育は仕事に活かせるか』筑摩書房.

- ベネッセ, 2015, 「第5回学習基本調査 高校生」 <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=4801>.
- 舞田敏彦, 2018, 「大学院進学志望率の国際比較」 http://tmaita77.blogspot.com/2018/02/blog-post_7.html.
- 溝上慎一, 2018, 『高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題（どんな高校生が大学、社会で成長するのか2）』学事出版.
- 村澤昌崇, 2020, 「大学院の受容・供給の現況」吉田文編著『文系大学院をめぐるトリレンマ 大学院・修了者・労働市場をめぐる国際比較』玉川大学出版部, pp.26-45.
- 文部科学省, 2021, 「令和3年度学校基本調査（確定値）の公表について」 https://www.mext.go.jp/content/20211222-mxt_chousa01-000019664-1.pdf.
- 山村滋, 2019, 「大学入試は学習誘因となるか—学習時の変化とその背景」, 山村滋・濱中淳子・立脇洋介, 『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか—首都圏10校パネル調査による実証分析—』ミネルヴァ書房, pp.51-75.
- 吉田文, 2020, 「学歴社会論と日本の大学院」, 吉田文編著『文系大学院をめぐるトリレンマ 大学院・修了者・労働市場をめぐる国際比較』玉川大学出版部, pp.1-24.

